

一歳六ヶ月児健診経過観察における遊びグループ指導の展開

―五年間の実践の報告―

上垣内伸子 古屋喜美代
市川奈緒子 山崎 聡子

はじめに

私達は、日本保育学第四十回大会において、研究奨励賞を戴いた。保健所における親子遊びの会という言葉は周辺の保育実践の研究発表でもあり、本当に思いがけない喜びであった。手探りの実践の中で戴いた今回の賞を、保育に携わる諸先輩方からの激励の声と思って更に精進を続けていきたい。

発表の趣旨を述べる前に、学会発表の場でも質問が集中した「遊びの会」の設立の経緯と活動内容を紹介をする。

「遊びの会」の概要

一 設立から現在までの経緯

三歳未満で発達上の問題を持つてはいるがはっきりとした障害があるともいえない子ども達の、日常的な保育の場が少ないという実状を知り、乳幼児健診で現実に親子共に日々の子育てに戸惑っているケースに出会う中で、私達保健所心理相談員は、心理相談だけではなく、実際に親と子が共に遊べる場の必要性を痛感していた。

私達が心理相談を行っている東京都練馬区では、障害

の早期発見・早期予防と同時にすべての子どもの健やかな成長を願って、親子を支えるためにきめのこまかい相談・フォロー体制を築こうと、医師、保健婦、保母、心理相談員など多様な専門職が連携して努力を重ねている。(1)また、区立の身障センターや親の会のグループ保育、幼稚園や保育園における障害児保育の取り組みはもちろんのこと、児童館の幼児グループや自主保育グループの活動も盛んである。しかしながら、前述したような親の場合、どちらの集団にも参加することに抵抗があることが多く、地域から孤立しがちであった。

こうした状況に因應する場として、昭和五十七年五月から、心理相談員数名が学生ボランティアを募って、月一回一年サイクルの親子教室「遊びの会」を開始した。開始当初の様子を、発起人である田丸尚美は次のように述べている。

『……親にとって身近な場として、乳幼児健診から直接結びつきやすい保健所で行ってみることにした。保

健所が保育園の代わりまでやることにならないか、教室を終了する目安やその後のフォローをどうするかなどの不安も出されたが、1年間の実践の後で再度考えることとしてスタートする。

そして月一回というペースでは、子どもの日常的な保育の場になりえないこと、地域のあちこちから集まることもあり、親同士が悩みを話し合えるつながりを作るのは難しいことがはっきりした。しかし、一人ひとりの親が着実な変化を見せていた。自分からだを動かし遊ぶ体験、……(中略)……同じような育児の悩みを持つ人を知り、さまざまな親子関係のありかたを目のあたりにすること——自ら療育機関の扉をたたく人も出てきた。こうしたことから、参加する親が子どもとの関係を見直し育児の見通しを育てる効果があるのではないかと考えた。』(2)

その後、月一回という回数は増やせないものの、お弁当の時間をとったり、毎回ニュースを発行してお母さん

の声を紹介するなどの工夫を重ね、五十九年からは保健所の事業として認められて一歳六カ月児健診の経過観察の一環として位置付けられた。保健婦の関わりも積極的になり、六十年からは専属の保母も加わってスタッフも充実してきた。

保育者が担当の親子を決めて三人一組（時には五人一組）で活動するうち、遊びの場という気楽さも手伝って次第に打ち解けた関係ができてくる。その中で、「我が子のことを知っている他の人と話をしたい。」という欲求を母親がこんなにも強く持っていたのかとしばしば驚かされることもあり、この「遊びの会」の活動は、子ども達の発達に直接働くというよりも、母親への効果や母親を通じての間接的な子どもへの影響がある活動ではないかと考えるようになった。今回の研究発表はこのことを明らかにするという動機を持って行ったものである。

二 活動内容

(1) 目的

① 集団遊びの中での方向性のある動きや共同作業の体験を通して、発達上の問題改善のきっかけを得る。
② 子どもと遊ぶことから現在の子どもの姿・問題等に気付く。

③ 親自身が楽しむ経験を積み、ゆとりをもった子育てにつなげる。

(2) 対象

一歳六カ月児健診心理経過観察児のうち、集団保育を経験することで発達上の問題の改善が期待される子ども。特に①多動傾向はあるが人との関係が全くつかないわけではない②母子分離不安が強く集団参加が難しい③全般的な遅れがあり、そのために過保護や放任気味になっている等の臨床像の見られる子ども。母親から、「外出すると目が離せない」、「他の子どもに迷惑をかける」、「他の子どもとレベルが合わない」といった訴えのある子どもである。

年齢は一歳七カ月～三歳、発達課題としては一語文獲得から二語文をめやすとした。

参加人数は15組前後である。

(3) 実施方法

月一回、土曜日の午前九時三十分から十二時まで、保健所の講堂において、各回毎にテーマ遊びを設定して実施した。五月から始め三月までの11回を1サイクルの活動とした。

会の流れと各回のテーマを図1、表1に示した。テーマ遊びは、初めの頃は体全体や手指を使う感覚運動遊び、次第にみたて遊び・ごっこ遊びという展開を考えて設定した。実際の活動においては、子ども一人ひとりの発達段階や興味の持ちかたが異なるので、遊びの中心については柔軟にとらえ、集団全体の動きに気付かいながらもそれぞれの親子の遊びが充実し楽しさを体験できるような保育者の関わり方を心がけた。

保育スタッフは、心理判定員5名、保母1名、保健婦1名、学生ボランティア8名。それぞれが担当を決め、母子―保育者という3人グループを核として活動を進めた。また、「遊びの会」に慣れてきた十月に母子分離し

て母親ミーティングを行い、親同士の交流・話し合いの場を設けた。

研究発表

一 研究目的

本研究では、月1回の「遊びの会」が参加する親子にとってどのような役割を果たしているか、なかでも母親の子どもへの関わり方への影響について考察する。また、「遊びの会」の活動内容や実施システムの有効性についても検討する。

二 対象および方法

(1) 対象

昭和六十年年度の「遊びの会」に参加し、発達上の問題の改善とともに母子の関わりや母親の受容の態度にも変化が見られたH児とその母親の事例を取り上げた。

(2) 方法

「遊びの会」活動記録・毎回の活動後の感想アンケート・母親へのインタビュー（昭和六十一年三月、六十二

年五月実施）・乳幼児健診時のカルテ記載等をもとにして事例の分析を行なった。

三 事例検討

毎月のテーマ(S60年度)

- 5月 シーツで遊ぼう
- 6月 小麦粉粘土
- 7月 紙ちぎり～紙ボール
- 8月 フィンガーペインティング
- 9月 砂遊び(近くの公園で)
- 10月 おふろごっこ／母親ミーティング
- 11月 箱積み木
- 12月 クリスマスツリー作り
- 1月 汽車ごっこ
- 2月 節分・豆まき
- 3月 ままごと

会の流れ

- 集合・体操
- 挨拶・くすぐり、ゆさぶり体を使った遊び
- テーマ遊び～あと片付け
- 昼食
- 手遊び・歌遊び
- 挨拶・解散

ここでは、H児の事例について、「遊びの会」参加前の状況・「遊びの会」における活動の変化・現在の様子を紹介する。文中の「」は、母親の言葉をそのまま記載した部分である。

(1) H児の成育歴

昭和五十七年十月一日生の男児。三十八週二六〇グラムにて出生。兄弟はなく、父・母との三人家族。乳児期には特に医学・発達上の問題は見られなかった。一歳六カ月健診にてことばの遅れ・落ち着きのなさ等の理由

で心理経過観察の対象となった。「遊びの会」参加時の年齢は二歳七カ月であった。

(2) 母親自身の結婚・出産について

H児の母親は、昭和二十四年生。二歳年下の夫と結婚し三十三歳の時にH児を出産した。H児が一歳の時、練馬区の夫の母宅の隣に転居した。

「結婚が遅かったので、子どもが出来るかどうか不安だったが、一年たたないうちにこの子ができて良かったと思った。」

(3) 「遊びの会」参加以前

転居後、母親自身も話し相手となる友達が見つからず、H児にも友達がいないことで困っていた。家の近くに子どもが少なく、公園等においても既にグループができている、仲間にはいっていかれない感じを持っていた。日中家にいることが多くなり、母子共に閉そく状態であった。

(4) 参加のきっかけ

一歳六カ月児健診の心理相談場面で、母親より、「一

人で勝手に出ていく」「私がいなくなっても平気」等日常の子育ての難しさの訴えがあり、「遊びの会」をすすめた。母親は後で、「効果については半信半疑で期待していなかったが、同じくらいの子と遊ばせられるというメリットを考えて参加を決めた。外出の理由ができるので自分のためにもいいと思った。」と語っている。

(5) 「遊びの会」参加記録

毎回の活動毎の、H児―母―保育者の関わりと変化を表に示した。

(6) 初めの頃の様子

参加当初の感想として、母親は、「この子は大勢の中に入っていけない子ではと心配だったが、何とか入っていけることがわかった。」「まわりの子どもにも興味を示して、これまでの一人遊びから少し変わったと感じた。けれども、一対一で相手をしてくれれば、私でなくても誰でもいいんだと思った。」と述べている。

集団の中で遊ぶ子どもの姿に、それまでとは違う何かを見いだして驚く一方で、大人から誘いかけるとだれに

でもついていくのを見て、自分への愛着の薄さも再認識した様子であった。母親はそれまでも、駅のホームでわざと隠れてH児の反応を見ること等を試み、母親を探さず、泣きもせず、他の人についていく姿に悩んでいたという。

(7) 毎回の活動後の感想

毎回の活動後に行う母親への感想アンケートから幾つか抜粋して紹介する。

*五月 シーツ遊び

「びっくりした。たった1枚のシートであんなにいろんなことができるのか。」

この回の活動は体を使って遊ぶことがテーマになっており、シートを使っていないないばあ・ゆらゆらハンモック・タクシーごっこなど身近な遊びから、シートの波くぐりやトランポリンといった大きな動きへと発展していく。この初回の驚きが続けるきっかけとなったよう

*六月 小麦粉粘土

H児は手に何か付くという感触が好きではない。そのため、これらの月の活動でも母親の予想通り嫌がったので困惑した様子が見えた。

*9月 砂遊び

「ふだんは砂が手についても嫌がるので今度もダメだと思っていたのに、山を作ったりして遊べた。友達と一緒にならできるかなとおもった。」

「これまでは怖がって出来なかったすべり台も、他の子どもにつられて滑っていたので驚いた。」

H児の行動に変化が現れ、母にとっては自分のイメージとは異なるH児を発見した活動となった。

(8) 「遊びの会」一年間の活動後の感想

一年間の「遊びの会」を終えた六十一年三月に、感想アンケートを書いてもらい、合わせて個別インタビューも行った。

*H児について

「参加して良かった。何よりも同じくらいの年齢の子と遊ぶことができた。」

「二人遊びからだんだんと友達に近寄っていくことが多くなった。一人遊びしかしないと思っていたのに。」

「二月頃から『おにちゃんになった』『すっかりしてきた』と思えるしぐさに気がついた。」

「いじめられる方だったのが、小さい子をいじめるようになっていて驚いた。」

保育スタッフも変化したと感じた時期が母親と一致していた(表1 十二月・一月参照)。十二月・一月の活動で、表情がイキイキと豊かになり、他の子どもへの関わりも増え、母親に対しても甘えていく姿がよく見られるようになった。

発達のにも二語文が使えるようになり発話量が増してきたこと、母親への甘えが出てきたが一方ではそれをガマンするといった行為が見られ、それを母親自身が感じとれるようになったこと等がこうした変化のきっかけではないかと考えられた。

*母親自身について

「自分はなかなか人と親しくなれないタイプだが、時間

をかけたなら親しくなれたと思う。回数が少なくて家に行き来するくらいに親しくなれなかったのが残念だ。」

参加当初は遠くから見守る事が多く、発言も少なかったが、「遊びの会」の後半からは、他の母親へ話しかける、スタッフの中にはいって手伝う等の積極的な関わりが見られた。

(9) 母親の流産

一月の「遊びの会」活動時に、母親は保育スタッフに、「H児が可愛くなってきたし、子どもがもう一人欲しくなってきた。」と話してくれた。実際、この時には妊娠していたことが残念なことにも流産という形で判明した。母親にはH児出産後に二度の流産歴があった。

結果的には今回もまた流産してしまったが、愛着が開始した時期に母親が床に着くことで物理的に分離を強いられ、「おかあちゃんネンネ」と自らに言い聞かせてそれをガマンするH児の姿、回復してからは「だっこ」と言って甘えてくる様子を見て、更に母子間の愛着が強まっていったようだった。

「しばらく世話をしなかったら、急におにいちゃんになった気がして、この子も成長したんだなと思った。」と母親の言うように、H児の成長に改めて気付くきっかけにもなった。

(10) 「遊びの会」終了から保育園入園へ

「遊びの会」のメンバーは、次なる集団への参加を決めて終了していくが、H児の場合も六十一年四月から保育園に通園することとなり、三月に試し保育に行ってきた。

「試し保育に行く前は、集団の中には入れるかどうか不安だった。試し保育には父が連れていったが、『はじめちょっと淋しそうにしていたがさつとみんなの中に入っていた』とのこと。すぐに慣れたことは嬉しいような淋しいような……」

「四月からは毎日保育園で昼間いないと思うと淋しい。きつと淋しくなると思う。」

(11) 現在の様子

保育園通園二年目の六十二年五月に、母親からH児の

現在の様子を聞いた。

「入園してまもなくから言葉数が非常に増え現在では話すことは殆ど問題がない。けれども手指の使いかたがやや不器用であったり、少し落ち着きがないということで、半年に一回巡回相談を受けている。」

「友達ができるのが早かったと保母から言われた。この頃は通園も友達と行くと言いだめた。保育園が楽しくなっているようだ。父が帰宅するのを待って、その日のことを一生懸命話している。」

「遊びの会」参加時の問題は、殆ど解消しているようだ。母親自身も父母会を通して友人ができ、行き来も始まったという。

四 考察

「遊びの会」参加以前、H児と母親の間には愛着関係がしっかりと成立しておらず、子どもの側には発話が乏しい、落ち着きがないといった問題があり、母親の側にもうまく相手をして遊べないという悩みがあったため、楽

しく心暖かな交流の機会が少なかったのではないか。何とかしなくてはという気持ちと、私が働きかけても変わりはしないだろうというアンビバレンツな感情と不安があったのではないだろうか。また、母親自身も転居後、隣家の義母とのつきあいや新しい地での友達作りなどに困難を感じ、十分にH児の気持ちをくみ取る余裕がなかったようにも考えられる。

参加当初、母親はH児の行動の多くを『困ったこと』

としてとらえることがよく見うけられた。例えば、他児に迷惑をかける・汚れる・言うことをきかない・呼んでもこないというようなことである。そうした一方的な視点が、同齡のグループ活動の中で、他の子の同じような行動に気付いたり、他の母親と話したり、保育者の関わり方を見たりする中で変化し、H児の楽しさを少しずつ共有できるようになったのではないだろうか。また、保育者との話し合いを手掛りに、H児の行動の文脈の意味するところを次第にくみ取ることができるようになったことで、余裕を持った関わりができるようになっていっ

たと考えられた。

言葉が増えた・他児との交流が増えたというH児の変化が、母親にH児に対して肯定的な感情を抱かせ、過去に流産の経験があるがもう一人子どもが欲しいという気持ちを持たせていったのではないだろうか。そして流産という出来事を乗り越えて、H児の成長を認識し、しっかりとした母子間の愛着を形成していったと考えられた。

人と親しくなっていくと自ら言う母親ではあったが、母子分離せず一緒に遊ぶ・母―子―保育者の三者関係を核として活動するという「遊びの会」のシステムの中で、他児と交流する新たなH児の姿に気づき、保育者の関わり方を参考にし、他の母親と気持ちを分かち合うことで、H児とのゆとりある関係と愛着が生まれてきたように思う。本事例の場合、母子一緒に集団遊びグループという「遊びの会」のシステムが有効であったと考えた。

引用文献

(1) 練馬区保健所保健婦研究会『ねりまの子の幸せをねがって』一九八四年

(2) 尾関夢子・三宅篤子編著『乳幼児のための健康診断』青木書店、一九八五年、p. 217～8

関連研究発表

第30回日本小児保健学会 一九八三年

『一歳六カ月児健診の経過観察に遊び指導を導入する試み』

第33回日本小児保健学会 一九八六年

『幼児期前期に多動傾向を示した子供の発達像に関する研究』

(上垣内 伸子・山崎 聡子 お茶の水女子大学)

(古屋 喜美代・市川 奈緒子 東京大学)

幼児の教育 第八十六巻 第十号

十月号 ◎

定価 四〇〇円

昭和六十二年九月二十五日 印刷

昭和六十二年十月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。